# 四山見学

江崎みどり

キャップランプのついたずつしりと重い鉄の帽子のひもをしめてもらいながら、私は思わず緊張していた。

四山坑の採炭現場は、有明海の海底六〇〇米によこたわる三池本層で、地熱のため温度も高く、ガスが発生しやすいという悪条件のため、外部の人はほとんど入坑させず、まして女の人はめったに入坑させないという話だった。

「しかし、時々ここの奥さん達が自分の旦那さんは一体どんな所で働いているのか見たいと云つて集団で入坑することがあります。一度見学すると奥さん達のサービスが途端によくなるそうですよ」と係の方が明るく笑われた。

太い鉄棒でかこまれた動物園の檻のようなエレベーターで竪坑を四〇五米下にくだると、そこから採炭現場である切羽まで、二里もあるということだった。腰かけの沢山並んだ人車とよばれる鉄製の車が、暗いトンネルのような穴の中にすべりこんでゆく。所々につい た電燈がどつどつした岩肌をてらしだし、地下水をくみ上げるポンプが規則的な鈍い音をたてている。そんな中で人車のゴウゴウという音がはね返る。見るもの聞くもの、私達にとつてすべてが珍らしい中で、時々人車が止ると地上と同じようなプラットホームがあり、人車の発車時間や終車の時刻をしらせる時間表がかかつているのがほほえましくて、緊張感がほぐれていくようだった。

片道四〇分という、この作業現場までの人車のゆき帰りは、重労働をする人々のよい休息時間となり、ねむつてゆられていく人も沢山ありますということ。キャップランプのついた鉄の帽子や腰バンドにつけた電池の重みを感じなくなると、炭鉱マンとして一人前でそうなればほんの短い休息時間にも坑内で、いつのまにか平気で眠つてしまうという。地下何百米の岩にかこまれた生活環境は人間をそんなにもたくましくするものかと驚いてしまつた。

人車をおりて切羽まで五分ほど歩く、その間にすれ違う人々が「御安全に」と声をかけあうのが私のこころにしみた。私達も「ご安全に」という言葉に送られて坑内に入つてきたが、これはこの世界の挨拶なのであつた。地上の挨拶にはみられない親しみと人間らしいひびきをふくんでいる。

地下六〇〇米という切羽、それは本当に炭鉱の最前線である。大きな音をたてて、石炭を運搬するコンベアという鉄のベルトが走りむつとするような熱気がたちこめている。その中で汗と石炭にまみれて「ツルハシ」を振る姿は、たくましいという一言につきて、見ているのは息苦しいようであつた。

岩石と、はつきり区切り目をみせて黒々と炭層が光つているのを見ると、自然の不思議さを思わずにはいられない。採炭の方法はこ こではカツペ作業といつて、鉄の太い大きいクサビのようなものをつなぎとめて炭層を支え、その間の石炭を掘り出してゆく方法がとられている。カツペというその鉄の支えだけが、おおいかぶさる炭層の落下を防ぎとめていると考えると、思わずカツペのつなぎ目が気になつてしまう。そんな中であちらこちらに立ち止り、ガスの検出計を岩壁に当てて、ガスの状態を検査する保安係の姿には何かうたれるような真剣さがあつた。坑内の事故がほとんど予測しがたい成りゆきから発生するとはいえ、これらの保安係の人々の努力がどれほど多くの事故をふせぎとめていることだろう。

地下水で足場の悪い採炭場を、カツペの間をくぐり抜け、くぐり抜け、切羽にそつて歩いている間は、汗をぐつしよりかいて無我夢中であ... やつともとの人車のある坑道にもどると、ほつりつめていた気持ちが一ぺんに抜けてしまいそうだった。いつのまにか、温度もずつと下つている。坑内には扇風機で絶えず風が送られているが、それでさえ、採炭の現場は三五度近くあつたのではないかと思う。

坑内に入る人の一日の賃金はいくらなのでしようかとお尋ねしてみると、手当と共に千円前後ということだった。一カ月二十五日も働ければよい方だから、家族の多い人々にとつては決してよい収入ではない。地下という異常な環境での激しい肉体労働への報酬としてはあまりにも安いという実感が身にしみた。

少しもどつて今度は、鉱脈をさがすために、ハツパをかけている掘進坑道へ向う。前を歩いてゆかれる案内の方がピツケルで道わきの岩をコツコツたたいて、カーンとはね返るような音のときは安全、にぶい音は岩に亀裂があつて落盤の危険があるときですと説明される。しかしそれも遠い亀裂を見つけるのはひとえに勘であるとの事。そう云えば炭鉱には「通気の神様」とか「排水の神様」といわれる方がいられるそうだが、それは理論的な計算以上に永年培われた勘がこの世界でいかに大切かを物語つているようでおもしろいと思つた。あとでわかつたことだが、私達を案内して下さつたSさんは四山の「通気の神様」Nさんは「保安天皇」といわれて、坑内の人々から信頼されている方だつたそうだ。

現場はハツパをかけ終つてしばらくたつた頃だつたらしく、飛ばされた白い岩石がかたづけられ、レールが敷かれているところであつた。鉱山病といわれる不治のけい肺病はこの仕事を永年やつていることから起るという。最近では設備の改善や早期診断などで昔のようなことはないが、絶対という予防法はまだないのだという。炭鉱に限らず生命を賭るという積極的な用心はなされても、職業病をふやさないという消極的な用心が完全にされるようになるのはいつのことであろうか。この現場に働く人々は大体において掘進の仕事を専門にするというから病気の危険は大きいわけである。

そう云えば、坑内には採炭夫、掘進夫の他にもいろいろな仕事をする人々がある。坑道は盤圧や側圧で、いきものののように毎日働いており、常に形を変えるのだという。特に四山は条件が悪く、ガスや流水が多いので、それを整備し維持してゆくためには一割の採炭夫に対して九割の人々が動員されているそうだ。

私達の日常消費している石炭はこれほどぼう大な設備と人力によつて整備され、掘り出されているのかと思うと何か不思議な気持ちがしてくるのだつた。

最後に全坑内の排水、通気の原動力となつている九百馬力ポンプ座におもむく。それは一つの大きな地下工場のようなものであつた。

再び人車に乗つて帰途についたが、そこでこの山に三〇年近く働いておられるSさんに昔の坑内の話をお聞きした。Sさんが始めて入坑されたころは、この坑道を馬が石炭を曳いて運搬していたそうである。馬は坑内ばかりの生活のため、視力が弱まり遂にはめくらになつてしまい、また採炭夫は三〇度以上の高温のために「フンドシ」一貫でツルハシを振つたとかめくらの馬がムチうたれながら通つたであろう坑道を、今は人車と炭車がダイヤ通り運行し、採炭現場から炭車の積みこみまでコンベアになつている。そんな炭鉱の長い歴史を私はふとSさんの表情に晩年の姿を見出したような気がした。

エレベーターが地上に出る瞬間、太陽の光が目にしみるようだつた。「こうして仕事を終つて出てきたとき、明るい光をみると本当にうれしいものですよ」とSさんはおつしやつていたが、キャップランプだけを頼りに坑内で働き、疲れて出てくるであろうヤマの人々の実感が、私にもはじめて、少しばかり理解できるような気持ちがした。

（筆者は四山社研講師大屋裕雪）氏（熊本商大講師）の夫人

【講座】

## 資本主義のからくり

奥田八二 (4)

前の講座で、賃金労働者が奴隷や農奴と比べて自由であるということを説明した。この自由は人類が数千年間求めていたものであつて、資本主義社会になつてやつと手に入れたものである。しかし、資本主義社会は資本がものをいう社会であるから、言いかえれば カネがものをいう社会であるから、資本（カネ）のないものは、何事も思うようにならない。さきにもいつたように、あらゆる自由をカネで買わなければならない今日の社会では、カネのない賃金労働者は、そこにころがつている自由でさえ自分のものにならない。カネがない為に才能のある子供も上級学校に出してやれないし、カネがない為になおる病人も殺してしまわなければならない。要するに資本主義社会では貧乏人には自由はないのである。

働けばカネが手に入ることぐらいは誰にもわかつている。なるほどよく働く人はそれだけ多くのカネを得る。しかし、逆にカネを多く手に入れる人ほどよく働いているかというとそうではない。資本家、家主、株主、地主、このようなヌシの名のつく人がよく働いているだろうか。いや、サツパリ働いていない。働かないでどんどんカネが手に入るようになつているだから、貧乏人は働きが足りないからカネがない、というのはデタラメなウソである。

では結局、労働とカネは密接な関係はない、ということになろう。ところがそうではない。カネを含めた一切の物は労働なしには手に入れることはできない。働かない人がカネを手に入れ、働いてもカネがあまり手に入らないのは、労働とカネとの関係がないからではなくて、搾取ということが行われているからである。資本家が働かないでカネを手に入れ、労働者が働いても貧乏するのは、労働者の働いて得るはずのカネを資本家が大部分取つてしまうからである。資本家は労働者に働けるだけ働かせておいて、そのカネの大部分を取り上げてしまい、残りの僅かを生活できるかできないかの程度しか労働者に渡さないのである。

資本家は労働者の労働を搾取するばかりか、労働者の自由をも搾取する。安楽も幸福も搾取する。それだけではない。逆に不自由と苦痛と不幸を与える。

このような社会は実際無茶だという外はない。しかし、社会制度がそれを許している限り、無茶だといつてもはじまらない。資本主義制度をなくしてしまう以外にこの無茶をなくする方法はない。けれども、この資本家に都合のよい制度は、警察裁判所や軍隊や法律や道徳や、これらを擁護する思想（ブルジョア、イデオロギー）によつて十重二十重に、実に堅固に守られているのである。そしてこれら十重二十重に守られたその奥に鎮座する資本主義制度の御本尊は何かというと、生産手段の私有制である。

生産手段というのは土地や原料や道具や機械や建物や、要するに生産に役立つ労働以外のあらゆる物をさすのであるが、この生産手段の私有こそが搾取の根元なのである。しかし、資本主義社会における搾取はそれだけによつて可能になつているのではない。生産手段の私有制の上に生産物の交換が行われる、つまり、商品交換ということが行われることによつて搾取が可能になつている。奴隷制や農奴制の下では、搾取は目に見える直接的な搾取であつた。資本主義社会では生産物の交換（商品交換）によつて搾取が行われるからここでの搾取は目に見えない。

この交換制度は、奴隷制度における糧の役割、農奴制における武力の役割を果している。資本主義社会においても、単に交換というスナオなやり方だけでは搾取が思うようにならない場合は、女工に対する糧のように、ストライキに対する軍隊の出動のように糧か武力が最後に手を出してくるのである。

この搾取を目に見えないものにしている交換は今までのうちで最も発達した搾取の方法である。交換によつて搾取が可能になると、糧や武力は無用になる。または、交換によつては搾取できない所にこそ糧又は武力が必要であつた。

交換には私有制が前提される。ニギリメシと柿のタネではないが各自は自分の労働の生産物は自分のものと認められていなければ交換は問題にならない。次に交換には分業が前提される。自分の生産物を他人が欲し、他人の生産物を自分が欲す、または、他人も自分も、各自の欲しない物を作り、他人の欲するものを各自が作つている。そこで当然生産物を交換できるし、また交換しなければやつていけない。つまり自給自足をしない状態が前提される。

そこで例えばニギリメシと柿のタネが交換されることになり、搾取がはじまる。（九大助教授）

## 芸術の回復

私達の生活と激しく交叉し閃光がほとばしるものでなければ少くとも今日の芸術とは言えない。或いは歴史的社会的に規定された私達の問題を常にスクリーンや舞台や小説のもつ問題と力ミ合せなければ芸術は歴史に生きるものにはならない。超歴史的存在である芸術の感動はやはり歴史的社会的に規定されている。

「私は洋画しか見ません」と云う人達を見る度に私は映画館と生活との間に断絶がある様な気がしてならない。外国映画や外国文学を真の芸術として通する役割はこの様な洋画ファンや外国文学ファンには任せられない。それは丁度堀辰雄「豪華者」から堀辰雄を奪か！……〉ジャツクが書き残るあの膨大な感動的ビラの一字一句を「チボー家の人々」を読んだ人は、恐らくいつまでも忘れないだろう。「一九一四年夏」は外ならぬ私達の問題でもあるからだ。スタインベツクの「怒りのブドウ」が私達に与える重苦しい感動は民族の相違を忘れさせる。けれども実存主義文学は栄えるがこの様なアメリカ文学は日本の人々の眼中にはない。「エデンの東」は絶賛されたが「セールスマンの死」は隅つこで光を放つただけだつた。問題はますます大きく且つ深いと言わねばならぬ。

芸術の「傍観者」ばかりがこんなにも溢れてよいものか？ そして何と沢山の読書会や映画感想会で芸術が空廻りしている事だろうか。映画は映画、小説は小説、私達は私達という風に。（Y）

## 用語解説

**AA会議**　アジア・アフリカ会議、またはバンドン会議ともいう。コロンボ会議五カ国（インドセイロン、ビルマ、パキスタン、インドネシア）の共同主催で、五五年四月十八日から二十四日までインドネシアのバンドンで開催。アジア、中近東、アフリカの二十九カ国が参加、日本から高崎経済審議庁長官が代表として出席し、また中共からは周恩来首相が出席した。全会一致のコミュニケの中で日本の提案を骨子とした平和宣言がなされた。これは「まづ何よりも世界の平和を求める。そしてその平和の中で経済的、文化的な建設を進める。これでなくては植民地主義も人種差別もなくすることはできない」という考え方で、そして幾百年かにわたつて彼らが歩んで来た道を再び繰返すまいという悲壮な誓いの表現であつた。一般に、会議が、共産、反共産、中立の三つの異なる陣営に属する国々の間で、植民主義の問題、世界平和の問題について全会一致の決議を行い、経済的、文化的な相互理解をなし遂げたことは予想以上の成果であつたと評価された。

**インターナシヨナリズム**　世界主義、国際主義。ナショナリズム（国家主義、国粋主義）に対して、個々の国を超越した国際協調を主張する主義。

**全体主義**　ヒツトラーが個人主義、民主々義に対して、ナチス・ファシズムの指導原理としたもので個人の自由や権利は全体の利益に従属すべきものとして否定し、人民の国家への幸せを強化した。戦後、ソ連およびその指導原理を一種の全体主義であるとの批判も行われている。

**チトー主義**　ユーゴスラヴィア人民共和国の首相で同国共産党々首たる、チトー元帥およびその一派の抱く民族主義的愛国的内容をもつた「自由共産主義」思想および政策をチトーイズム（主義）という。

共産主義国家を希望しながら自国の自主性を主張し、ソ連の衛星的存在たることを好まない。このように二国を支配する共産党がチトーイズムの形をとることをチトー主義という。

## 文芸募集締切迫る

### 素人大いに歓迎

△創作　四百字詰十枚以内、選者＝野間宏、賞金入選一席一千円、二席七百円、三席五百円

△詩　一人一編、選者＝野間宏賞金入選一席五百円、二席三百円、三席二百円

△短歌（題＝音）一人二首、選者＝岩本宗二郎　賞金天三百円、地二百円、人百円

△俳句（題＝初日）一人二句、選者＝吉岡禪寺洞　賞金右同

△川柳（題＝餅、とそ）一人二句、選者＝遠水豊二郎　賞金右同

△児童綴方（題＝時計）編集部選、四百字詰二枚以内、賞品

△感想文（題＝政党と組合運動、題自由）編集部選　四百字四枚、賞金一位五百円、二位三百円、三位二百円。主婦は盛見、四百字一枚

△寫真（題自由）大きさキャビネ、一位五百円、二位四百円、三位三百円、その他各種佳作にも賞品進呈

※締切　十一月三十日

※宛先　三鉱労組本部「みいけ」編集部及び各支部教宣部